



5月。眩しいほどの光と新緑に包まれて、大きく手を広げ深呼吸をしてみると、体の隅々まで浄化されていくような不思議な感覚になる。「生かされて、生かして生きている」この思いが蘇ってくる瞬間でもある。

この地球上で人間は決して特別な存在ではない、生きとし生けるものすべてのものが平等で、かけがえのない存在であることを、今この世界が知らせてくれているような気がしてくるのである。かつて、この地球上で一番厄介な存在は人間なのだと確信をもっていたが、「あなたも一緒に生きているのよ」「あなたのいのちもかけがえのないものなのよ」と語りかけられてくると、それは裏切られても、裏切られても決して見捨てることのない仏のお慈悲にも似た優しさに包まれているような思いになってくるのである。

どこまでも「自己中心の世界」から、過去と未来に責任をもって「共に生きる喜びの世界」があることを信じて生きていきたいものだと思う。

教化学研修室研修員報告

教務所だより「三月号より」

M・S

教化学研修室で学ばせていただいた八か月がたちました。

私は、普段サラリーマンをしていますが、お寺とは無関係の仕事をしています。そのため、日常生活では共に学ぶ仲間がありません。教化学研修室では、先生方のお話を聞き、お聖教のお言葉を学び、それに対する思いや疑問を共有する仲間がいます。お聖教の言葉の解釈一つをとっても、自分一人の頭では独りよがりな、自分だけの解釈で理解しがちです。しかし、先生方、先輩たちから自分の考え方とは違う解釈をお聞きし、そういった意味もあったのか「自分の理解の方は少し違っていたな」と思うことがたくさんあります。

蓮如上人は「談合せよ」「談合すべき」とよく「談合」を勧めていらっしゃいます。自分一人の中でとどめるのではなく、先生、先輩、仲間たちと語り合っていくことで、自分とは異なる考え、思いを知ることができます。それはすなわち自分の理解の幅を「広げていく」といって繋がりが、また、今以上に学んでいきたいと思いつつ、未来に向かふこの励みとなります。

共に学ぶ仲間がいるという安心感もあり、毎回楽しみに教化学研修室に向かわせていただいております。これからも教える向き合い、これからのお寺の在り方についても考えながら、学びを続けていきたいと思います。

住職の思い

結婚してすでに十年が経つようです。

不思議な縁から、今の彼女の存在がここにあります。

現実を受け入れながら、生き生きと生きる姿には頭が下がりますが、未来を見つめる彼女にはいつもわくわくさせられています。

これから先、寺院経営の困難さも深刻化してくると思われるかもしれませんが、ご門徒との関係をより密にしながら、聞法道場としての本来の寺の姿の実現に取り組みたいと思っております。



お念仏を守つて四〇〇年

報徳会「勤まる。」

於 教順寺

四月十四日(土)十五日(日)

十五日(日) 法話風景 ↓

お天気が心配されましたが、雨の心配もなく暖かい一日でした。法話では、プロジェクターを使いましたが、満堂のせいもあってか横からは少々見にくかったです。

命を懸けて守るべきもの「この私に何がある？」 ↓

今月の掲示板

死ぬことが 情けないのではない 空しく終わる人生が やりきれないのだ」

念仏詩人 浅田正作



慶長5年(1600年)東本願寺初代となる 教如上人」を、この地の門徒が命を懸けて石田軍からお守りした歴史は、お念仏相続の歴史そのものであります。一年に一度の 報徳会」には教如上人から送られた 教如上人」の御寿像と 本尊」が掲げられ、お墨付き」が拝読されます。

また毎月十日には、彰如上人、闡如上人からの御書が拝読されるのです。

そこで昭和三十一年に闡如上人からいただいた 御書」をここに紹介いたします。そこには闡如上人からの感謝の思いと、願いが込められています。それほど難解ではありませんので、読んでみてください。

釋 闡如

大谷 光暢 おおたに こうちよう、千九百三年十月一日・一九九三年四月十三日、満九十二歳没)は、明治時代から昭和時代にかけての浄土真宗の僧。
東本願寺第二十四代法主。

「闡如上人」の御書より

釋 闡如

慶長五年関ヶ原合戦のみぎり教如上人関東より帰洛したまはんとしてその地に於いて危ふくならせたまへるをその許二十個寺の僧俗力を合わせ命をすてて救いたてまつれること古き文書によりて明らかなるが仏法の爲めに身命をも顧みざらしこと末代ありがたく覺ゆるなり

上人いたくこれを喜はせたまひて大悲尊像を附与せられりしを縁とし爾来土手組をむすび十日講をおこして代々念仏相續せらるること まことにこれらの人々の力によること多きことなればその兎孫たらん人々はその徳をしたひその恩にむくいんために先づ真宗教化のおもむきをよくききひらきまことの信心を決定してしかるのち各々本分のはたらきを至さる可きこと何よりの肝要たるなり

それ阿弥陀如来と申すは われら迷いの苦惱にせずむ凡夫をすくはんとて大いなる本願をたてたまひその本願のなりませるすがたを南無阿弥陀仏とは申したてまつるなりいまわれらこれを仰いて念仏申すことはひとへに本願の御もよほしによるが故にこのまますなはち如来の大明におさめとられてつねにその御まもりを蒙むる身とはなれるなりさればこの光明の中に在りては人々いよいよ同信のよしみをあつくして念仏のよろこびを日夜の行ひにあらわし世の為め国の為にはげみまつるべきなりこれすなはち仏恩祖恩に報いたてまつる所以にして祖先か身を以って示したる報恩行も同じところによるものなりと思ひ知らるべきものなり あなかしこあなかしこ